病理診断科
Dept. of Pathology

詳細はこちら

診療科部長、教授
こうはし　けんいち
孝橋　賢一



専門
骨軟部腫瘍

スタッフ

副
講師　おくの　たかひろ　**奥野　高裕**
【専門】小児腫瘍

講師　しおはら　まさのり　**塩原　正規**
【専門】腎泌尿器腫瘍

診療方針

当科は、患者さんの治療選択のため、可能な限り迅速かつ正確な病理診断業務を行うことを心がけています。
大学病院内のみならず、あべのハルカス内にある MedCity21 健診科からの検体も診断しており、市民の皆様の病気の早期発見にも努めております。

診療科の特徴

【病理診断とは】
病理診断科では患者さんから採取された組織や細胞を顕微鏡で観察し、疾患の診断や病勢・状態の評価を行っております。病理診断は患者さんの治療方針決定に大きな影響を与えるため、可能な限り迅速かつ正確な病理診断を提供することを基本方針としております。附属病院内のみならず、あべのハルカス内にある MedCity21 からの検体も診断しており、市民の皆様の病気の早期発見にも努めております。

【具体的な業務内容】
腫瘍性・非腫瘍性を問わず全身の疾患を診断しており、免疫組織化学検査・分子遺伝学的検査や中央病理診断を活用し、若手医師を含むチーム体制で精度の高い報告を行っております。特に腫瘍性疾患においては骨軟部腫瘍を主とする希少がんにも対応しており、院外からも多数のコンサルテーションを受けております。また特定の分子標的薬の投与可否を決めるコンパニオン診断も当科が主体となって行っており、日々進歩する診断薬についても、常に最新の知見と技術を取り入れております。
当科はまた、がん診療における検体精度管理で中心的な役割を果たしており、治療方針決定に不可欠ながん遺伝子パネル検査（FoundationOne、GeneMineTOP、ヘムサイトなど）に提出する検体については、ゲノム診療用病理組織検体取扱い規程を遵守して適切に管理しております。さらに、がん遺伝子パネル検査の結果を検討するエキスパートパネルの構成員として参加しており、検体提出から解析結果までの一連のプロセスに適切なフィードバックを行っております。
細胞診もまた、患者さんの正確な病態把握のために重要な情報になり得ると考えております。このため､病理部において細胞検査士（スクリーナー）と議論できる環境を整備しております。MedCity21 から提出される検体では細胞診による早期発見効果が最も期待される領域であり、医師・技師が一丸となり市民の皆様の健康を支えております。

【他科との連携】
特に非腫瘍性疾患においては、時に複数の診療科の関与を要する症例もあり、日頃から臨床診療科との連携を深め合同カンファレンスを行っております。このように腫瘍性・非腫瘍性に偏らず、多くの臨床診療科と連携し、医師・技師・コーディネーターとの結びつきが強いことが特徴です。

【病理解剖について】
病理解剖は院内・院外あわせて毎年 30 例前後を実施しております。剖検診断に加えて、検討会を開催しております。臨床医と討論しながら生前に行われた診断や治療が適切であったかどうかを検証し、その結果を臨床診療科にフィードバックしております。この体制により、当院の医療の質の向上と、視野の広い医師の育成に貢献しております。

主力疾患・対応できる疾患

病理診断科は、院内全診療科および院外医療機関から提出されるすべての検体を対象としています。腫瘍性疾患（悪性腫瘍・良性腫瘍）、非腫瘍性疾患（炎症性疾患･自己免疫疾患など）を問わず、あらゆる臓器･疾患の病理診断に対応します。

主な診療実績

組織診断	15,621 件
迅速診断	817 件
細胞診	17,626 件
病理解剖	院内 21 件、院外 9 件